

風の末裔シリーズ・6th シーズンの5

夏巡 ~なつめぐる~



「ああ、まったく、そこじゃないっから!!」
夕方の埃っぽい執務室。

山のような未処理の書類の前で、紫の前髪のリリのヒステリー声が響いた。怒鳴られたのは、これまた山のような書類を抱えて右往左往する、赤いバンダナのレン。

「東の地域の書類はそっちのファイルだって言ったでしょ!!」
「こ、これは東でも河の分野だからこっちだろ。あうう、入らないぞ」

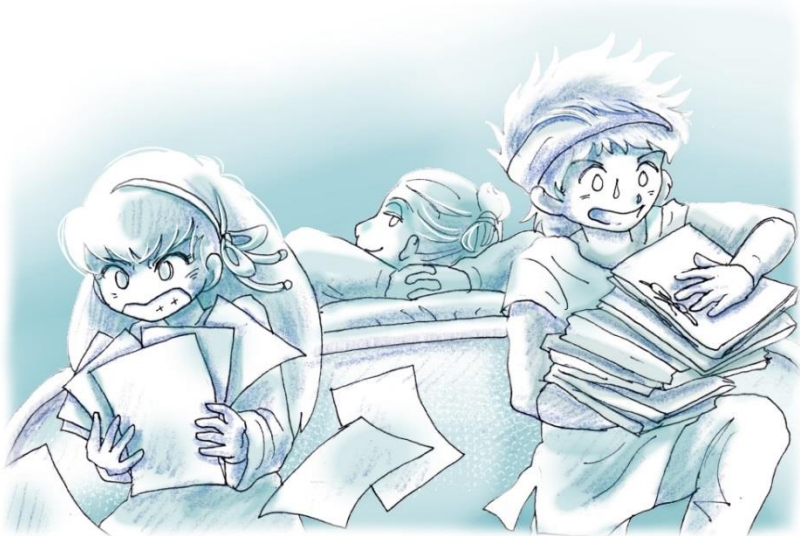
「河なら河って言いなさいよ! そのファイル、もう一杯じゃない? 河の中でも分類しなきゃなんないっていうの?! ああ、もう〜!」

レンは、唇の先っほまで出掛かっている口答えを呑み込んで、この忌々しい作業をとっとと終わらせようと努力していた。しかし片付けても片付けても、書類の山は一向に減らない。片付けが苦手な者が二人寄ると、厄介も二乗になるのだ。

「ぶお〜い、お前ら、キリキリ働けえ。そんなペースじゃ日曜もご出勤だぞお」

長椅子にドッカと収まったホルズは、片目を開けてのんびり茶をすすっている。

「げー! 日曜!!」



レンが慌てふためいて手を早めた。

明後日の日曜は、蹴り玉ゲームの試合があるのだ。ただの試合じゃない。部落をあげてのお祭り行事…いわゆる運動会みたいなもんだ。子供がそれに参加出来ないなんて、子供にとっては大事なのだ。

「な、何であたしがこんな目」…」

リリはいつもの自信満々っ振りは何処(いす)へ消え失せたか、泣きそうな声で頭を抱えている。

「自分で、カノンの分の罰則を肩代わりするって言ったんだろっが」

「厩掃除だと思ったからよ。こんな頭の痛い作業だと分かっていたら・・・うっ・・・」

執務室の他の面々が戻る時間になって、ようやく本日の作業終了のお許しを買った二人は、ヨレヨレの足取りで帰り道を辿った。

「カ、カノンはいつ目を覚ますのっ？」

「今朝のおウネ婆さんの話だと、まだしばらくは眠っていきそうだって。でも、毒にやられてるんだから、起きても当分は無理させられないよ、リリ」

「……………」

「そんなに書類が苦手？」

「何がどう苦手か説明も出来ない位苦手だわ」

リリは書類に書かれた文字を見ていると、頭痛がして具合が悪くなるというのだ。

「意外だな、執務室の一員なんて、超エリートで弱点なんてないかと思ってた」

「誰にだって苦手はあるわよ。だいたい、あの文字って代物？何であんな同じようで違う形の羅列を、皆すら理解出来るのよ？」

「そ、そうっ？」

「『書き』は、考えながらゆっくりやれば何とかなるわ。でも『読み』ってのがさっぱりよ」

レンは呆れて肩を竦めた。文字なんか、修練所の低学年で普通に習っし、生きていく内に自然に身に付くモンだろ？

「修練所は、卒業したんだよね？」

「…んん、…まあね…」

リリはちよっと口ごもった。

「あ、あたしは、石板を使わなくてもいいって決まりだったの」

「はあっ？」

「だから、石板を使う数式や書き取りの授業は、出なくてよかったのよ」

「何だそりゃ?! 数式やんなくていいなんて、夢のようだよ。誰がそんな事決めたの?」

「あのヒト、…サオせんせ」

「ふええ? せんせ、ズルいなあ。長娘だからって鼻唄じゃ…」

最後まで言い終わる前に、目の前に二本指がピッと突き出され、燃えるような目のリリがズスイと顔を寄せて来た。

「あたしの事は何て言ってもいいけれど、あのヒトの悪口は、許さないわヨ! あんただろうと!」

「う、うん、分かった、了解…」

レンが目を寄せて返事をし、リリは興奮した自分にちよっと恥じ入って、指を下ろした。そして三步先へ走って、空気を切り替えるように、ぐるりと回った。

「カノンの所に寄って行くでしょ? 寝ている間にヒゲ描いちゃおうか?」

「先っぽの渦巻いてる奴か?」

レンも気を取り直して笑顔になって、二人並んで診療所に向かって駆け出した。

それにしても、リリにも苦手な物があったんだな。しかも読み書きなんて簡単なコト。執務室の一員だったって、案外長娘だから特別に入はいれているだけなのかもしれない。

翌日も、修練所の終了の鐘と同時に、蹴り玉の誘いも断って、レンは執務室にタッシュした。とにかく今日中に罰則を終わらせて、明日の蹴り玉大会に出場したい。

「おお、苦労だな」

大机のホルズが、書類の山を積み上げながら待ち構えていた。

「こんにちは、リリは?」

「今日の任務は厄介だからな、戻れても、夜中になると思うぞ」

「え、ええ——っ!!」

「リリは執務室の仕事が本業なんだ。子供の本業は勉強と罰則。文句を言う前に手を動かせ」

「うう…」

過去の書類の山を分類して、閉じて、棚に収める作業。山積みになった未処理の書類は見事なまでにバラバラで、リリでなくとも、文字の羅列を見ていると気持ちが悪くなって来る。

文字大好き書物中毒のカノンなら楽々こなすんだろうか?

まったくあの時、自分が悪者に引っ掻かれればよかった…。

「いやダメだ」

書類を抱えながら、レンは頭を振った。ケガしちゃったら蹴り玉大会に出られないじゃないか。

「何が駄目なんだあ？」

ホルズが長椅子で、独りモンゴル将棋(シヤタル)の駒を並べながら、香気な声で聞いてきた。暇ならちよっとくらい手伝ってくれたっていいの……。

「あの…、ホルズさん。実は明日、蹴り玉の大会があるんです」

「おお、知っているぞ。お前、上手いんだってな」

「は、はい、それで…」

「じゃあ、さっさと終わらせてくれ。罰則理由で試合にエースを欠くんじゃ、俺がガキどもに恨まれっちまう」

「……………」

泣き落としも効きそうにないか…。

その夜は遅くまで執務室で粘ったが、ユウジーンが戻った時、いい加減ホルズに追い出された。もっとも、どんなに粘っても、今日中には到底終わりそうになかった。

半泣きで俯うつむきながら歩くレンの横で、ユウジーンが気の毒そうに慰めた。

「罰則はケジメだからなあ。こればかりはどうしてあげようもない」

「だって、そもそも馬を盗んだのは、ユウジーンを助けたいからだったんだよ！」

「ホルズ様だって解っているさ。ただやっぱり、許しちゃうと他の子供に示しが付かない。草の馬の訓練が受けられる代償みたいな物だからね。まあ、今回は残念だったって事で…」

「今回？ 僕、来年はいないんだよ！」

「……………」

レンはその夜は悔しい気持ちで眠れなかった。やりたい事が自由にならない。子供って損だ。

日曜日。

忌々しい程の晴天だった。こんなに明るい朝なのに、起きた瞬間鉛みたいな気持ちになるなんて。

レンがどんよりした表情で顔を洗っていると、後ろから蹴り玉が飛んで来た。

「わっ?!」

受け止めた正面で、ユウジーンがウインクして言った。

「よ！ 悩める青少年！ 行けるみたいだぞ、蹴り玉大会」

「えっ?!」

「明け方リリが戻ってね。今日は自分が一人で罰則やるからって、ホルズ様に掛け合ってくれたらしい」

「ホントに?!」

「本来なら徹夜明けは休養日なんだ。リリに感謝しろよ」

「うん!! うん!!」

レンはたちまち子供らしく元気になって、蹴り玉をドリブルしながら会場へ向かって駆けて行った。

「ゲンキンだなあ」

見送りながらユウジーンも、懐かしそうに目を細めた。

まあ、自分だってあの位の年頃は、蹴り玉が人生の最重要事項だった。

ただ、リリ…、あいつ、大丈夫かな？

大会場所の修練所の広場は、参加する子供達や応援の家族で賑わっていた。たまの行事に、皆ワクワクにここをしている。

就学前の小さい子が駆け回り、気の早い家族は、土手に宴席を広げている。

レンが駆け付けると、同級生達は歓声を上げて出迎えてくれた。よかった! 参加出来て、ホントに!

最初の方は下級生の試合だったので、レンは仲間達と土手に座って、見学していた。

「よ! 馬盗人うまぬすつこ小僧!」

人聞きの悪い声に振り向くと、よく見知った厩番の青年がいた。馬事係の中で一番若いこの青年は、レンが馬を盗んだ馬房の管理者で、戻ってからこっぴどく叱られた。

しかし、レンが草の馬の訓練を受けられる許可を、何でか嬉しそうに持って来てくれたのも、彼だった。

「弟が出場するんだ。お前の対戦相手のチーム。俺がコーチしたんだから、なかなか手強いぞ」

「へえ! お手柔らかに」

青年は、レンに麦菓子差し出して、隣に腰掛けた。

「懲罰が厩掃除じゃなくて、時間のかかる書類整理をやらされているって聞いて、参加出来ないんじゃないかと心配していたよ。間に合って、よかったな」

「いえ、罰はまだ終わっていないけれど、リリのお陰で来られました。今日一人で書類整理を引き受けてくれて。後で埋め合わせしてやんなきゃですよね」

「…リリ…?」

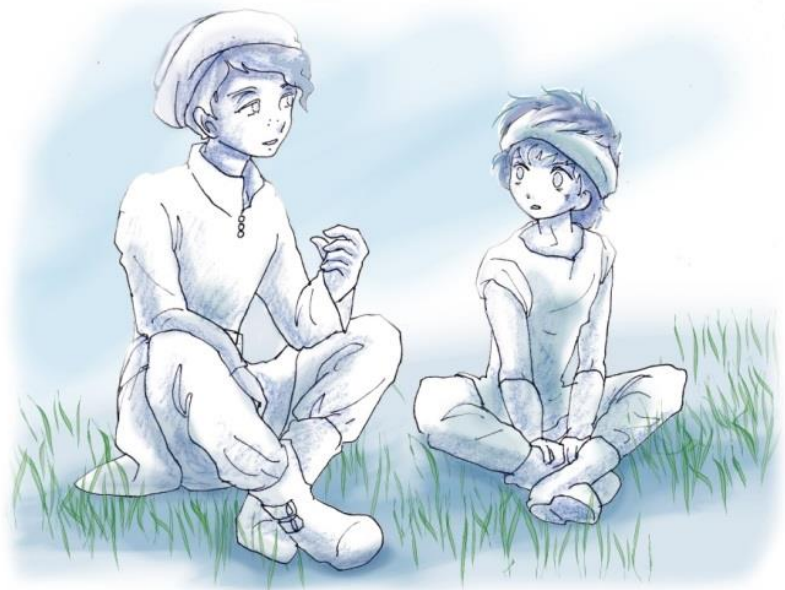
青年は不思議そうな顔をして首を傾げた。

「リリ…って、長娘の、あの…リリだろ? 彼女、書類整理なんか出来るのか?」

「えっ…?」

「俺が修練所の高学年の時、あの子、入学して来たんだけれど」

「いや、そうか、努力して読めるようになったのか、彼女…」



青年は自己完結して話題を切ろうとした。

「リリ、修練所に入った時は随分苦労したって言っていました」
リンはわざと知ったか振りしてみた。

思い通りの青年は、この仲良しっぽい少年には、リリは何でも話しているんだろうと、気を許してくれた。

「そう、ホントに、入学した当時は大変だったな。文字を覚える事を強要した教官を吹っ飛ばすわ、教室の黒板を粉々にするわ、拳げ旬にはヒステリー起こして校庭の真ん中で大竜巻だもんな。誰も取り押さえられなくて、俺ら半日外へ出られないで避難していったっけ。あれは強烈だった」

「……………」

「さすがの長様もあの時は困り果てていたな。入学三日で、早、就学する事を諦めて」

「そっ？、えと、でも、修練所は卒業したって…」

「ああ、あのヒト」

青年は、遠くで係員として走り回るサオ教官を指した。

「あのヒトが、毎日彼女ん所に通って、我慢強く話し合ってたんで、彼女は文字の授業は受けないうって事で、修練所に通い出したんだ。父兄とか、あちこちから文句が上がったのも、サオせんせが説得して回ったって。いいせんせだよな。俺、今でも好きだよ」

「……………」

「聞いていなかった？ 彼女から」

「う、うん…少し聞いてた。そ、そう！ 数式やんなくていいって、お得だなあって思った！」

「お得ねえ…。確かに、上級生の講義に勝手にバンバン出まくって、好きな講義だけで単位の帳尻合わせて、とっとと卒業しちゃったけれど。あれ、お得っていうのかなあ？ 友達もいなくていつも独りでさ。だから今、お前らとつるんでるの見て、不思議な感じ…ってのが正直な感想さ。この間もビックリだったし」

「この間って？」

「お前が盗んだ馬に乗って帰って来た時。馬事係の詰所に振ねじ込んで来たんだ。レンの馬泥棒の責任は自分にあるんだって」

「えええ…」

「何だか、カノン…？ あの子が予知を早くに伝えて来たのに、取り合わなかった自分がイケなかったって。彼女があんなに必死で沢山喋るの、初めて見た」

「……………」

「それで、まあ、事情も事情だし、お前の草の馬の訓練の凍結

も解除になったのさ。これは聞いていなかったろ？。伝えておいた方がいいと思ったから」

「……………」

広場の端から蹴り玉をドリブルしながら、一人の少年が駆けて来た。

「兄ちゃん、ヒールキック教えて！」

「よし来た！ じゃあな、レン」

青年は麦菓子をもう一つレンに渡して、土手を滑り降りて行った。

レンはふらりと立ち上がって、吸い寄せられるように、係員の詰所に歩いた。明るい広場の歓声が、さっきと比べて少し遠くになった気がする。詰所に目当てのヒトが、丁度一仕事終えて休んでいた。

「サオせんせ…」

「よおー！ レン。参加出来て、よかったな」

「せんせ…あの、今、一つ、聞いてもいいですか？」

「何だ？ 相手チームの弱点は教えられないぞ」

「リリの、事です…」

「ああ、何だ？ リリの弱点も教えられないぞ」

「いえ、リリ…、文字が読めないって、本当ですか？」
「……………」

「だって、カノンに借りた物語の本とか、手紙とか、普通に読んでいるから」

「ああ、レン、それは…、リリはね、文字の形から内容を読み取らないんだ」

「えっ」
「書かれたモノから、書いたヒトの心を読み取れるんだ。それはそれで凄い能力だと思うがね」

「……………」
「その代わり、ただの形としての文字を認識出来る普通の能力を、神サマは、くれ忘れちゃったんだな」

「……………」
「分かりにくいのか？ そうだな、私も当時は理解するのに時間が掛かった。そういう子供もいるんだって事に」

「あの、じゃあ…じゃあ、ただの資料とか報告とか、心の入っていない書類の文字は？」

「ちんぷんかんぷんだらうかな」

「…!!」

「あああ、もう！ これ、何て書いてあんのよお?!」

紫の前髪を掻きむしる娘に、ホルズは長椅子から顔を伸ばして覗き込んだ。

「へ西の川の治水に関する池之端部落の陳情書だ。経過と事後報告とまとめて綴じておいてくれよな」

「シ・ゴ・ホウ・コク…? とれよお?」

「これだよ、リリ」

「?」

大机の横で、当たり前みたいに立って書類を差し出している赤いパンダナの少年に、リリは元より、ホルズも目を真ん丸にした。

「とつとつやっちゃおうぜ」

「あ、あんた！ 蹴り玉の試合は?!」

「ん、うん…」

「うんって、どうしたのよー」

「いいんだ」

「いいって事ないでしょ！ あんた、来年はいないかもしれないのよ。一生にいつぺんの大会でしょー」

「うん、だから、勉強の成果を上げて、来年も留学させて貰えるように努力するよ」

「そ、そういう事じゃなくてー」

「リリとこややって作業する今も、多分、一生にいつぱんだよ」

「……………」

「ん・あー……」

ホルズが伸びをして立ち上がった。

「飯の時間だ」

「へ？」

「俺は弁当があるが、お前達は？」

「持って来ていませんよ。……って、早過ぎませんか？」

「だって、お前らと昼飯食べたいってお仲間が来ているぞ」

「っ？」

ホルズが視線で指す窓辺と戸口に、数人の少年が鈴なりに顔を連ねていた。さつきレンが、『ごめん！』って頭を下げて別れて来たチームメイト達だ。

「……みんな……」

「へえ、執務室ってこうなってるんだ！」

「ね、ホルズ様、試合が終わったら僕達も手伝うから、レン、

試合に出してあげて」

「おねがいー！」

子供達の前に進み出たホルズは、しかし腕組みして怖い顔を
つた。

「手伝うのはダメだ。二人がやるべき罰則だからな」

「ホルズ様……」

「第一、レン」は今日の罰則は休んでいい許可を出しているぞ。
俺を悪者にしないでくれ。ここにいるのは奴の勝手だ」

「レン……」

少年達はレンを凝視した。

「ごめん、みんな……」

レンは重ねてもう一度謝った。

「オンナノ」に罰則押し付けて、自分だけやりたいコトやっ
てるなんて、カッコ悪いじゃん、そうだろ？」

「う……ん……、じゃあ、リリも連れてけばいいー！」

「うん、そうだ！ 連れてこよう！」

「な、何でそうなるのよ?！」

目を真ん丸にして後ずさるリリに被さって、腕組みしたまま
のホルズが子供達に迫った。

「リリには罰則休みの許可を出していないぞオ」

「ホルズ様……はあ」

「しかし、お前らと飯を食うのは許す。飯の時間、飯を食わず
に他の事をするのには関知しない」

「っ？」

「とつとと連れていけ」

「やったあ！ 行こうぜ！！」

少年達が執務室に雪崩れ込んで、レンの手を取った。

「ありがとうございます、ホルズさん！ ありがとうございます、みんな！」

レンは皆にお礼を言っていて、それからドサクサに紛れて隅に行つてしまつたりりに、手を差し伸べた。

「行こう、リリ」

「だ、だから、何勝手に決めてんのよー！」

壁に張り付く女の子に、男の子達も手を差し出した。

「行こうぜ、リリ」

「応援頼むよー！」

「うん、行こ、行こー」

生まれて初めての事態に目を白黒させる紫の前髪の娘に、レンはもう一度言つた。

「行こう、リリー！」

「・・・ふふん、そんなに言うのなら・・・」

リリのごまっしやくれた言い方は中途半端に引き子ギられた。皆に引く張られて、いきなりタッシユで走らされたからだ。

「ちよ、ちよっとは手加減なさいよ・・・あたし、徹夜なの

みお～～」

子供達の集団の輪の中で遠去かるリリの悲鳴を、ホルズは、にこやかに窓辺で見送つた。

「シド、エノシラ、凄いぞ、お前さんらの息子は」

里へ来たばかりのリリを、自分はじめ、大人達は扱いあぐねた。とにかく、他の子供が当たり前前に出来る事に、ことごとく躓つますくくのだ。今だって、過ぎた能力の気難しい娘は、一部の者を除いて、里の中で孤立している。

「大した息子を送り込んでくれたよ。有り難つよ、お二人さん」

大机には、レンが決勝ゴールを決めた記念の蹴り玉が乗り、その横で、とうとう二人の子供は書類整理を終えた。

「やったあー！」

リリは文字を読めないと割り切つて役割分担し、作業を効率的に進める工夫をして、その日の夜には全ての書類が棚に収まつた。

「おおー、ご苦労さん、二人とも」

ホルズがいつの間にも用意したのか、熱い飴湯を手渡してくれた。

「有り難うございました、ホルズさん」

「何、俺は、なんも手伝つちやいない。お前さんら二人だけでやり遂げただんだ・・・、ほい」



ホルズは、これまたいつの間にも用意していたのか、小さな木フダを取り出して棚に張り付けた。レンとリリの名が記されている。

「お前さん達の努力の証だ。ずつつと残るんだぞ」

「マジで?!」

「ああ、奥の棚を見てみる」

「え? わあっ!」

奥の書棚にもよく見ると、子供の名のフダがいくつも貼られていた。

「へえ」

「そのジュジュっていうのは、ユウジーンだ」

「ホント? 凄いで、一杯ある! ユウジーン、罰則チャンピオンだったの?」

「はは、違うが…」

ホルズが言葉を止めたので、レンもその視線を追った。

リリが、ユウジーンの棚より一つ前の棚を凝視している。棚の列の一番最初だ。レンは近寄って、その棚のフダを見た。

「シン…リィ…? 子供の名前じゃないね?」

「ああ…」

ホルズはちょっと目を細めてから、リリに話し掛けた。

「あいつもここで、ちょっとの間、執務室の一員だったんだ」

「そう…そうなの…。そっか、あんた…、ここに、いたんだ。ここで、過ごしたんだ…そっか…」

リリは砂漠の遺跡で宝物を見付けたみたいに、木フダの埃を指で拭いた。

「しんりい…のナマエ…、シンリィのカタチ…、あんた、こんな文字だったのねえ」

くおしまい

